

国際交流活動から得た学生の学び -2016年度カンボジア・スタディツアー報告-

吉田 美穂¹⁾*・丸山 純子¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部

(2017年11月15日受理)

2016年度の国際交流活動として「カンボジア・スタディツアー」を実施した。本年度は研修前に新見英語サロンの協力を得て、カンボジアからの留学生を講師に招き、カンボジアの歴史について学び、クメール語の研修会を設けた。研修は小学校訪問、アンコール小児病院の見学、郊外の巡回診療の同行訪問、CVSGジャックフルーツ園の見学と植樹、トンレサップ湖、アンコールワットの見学を行った。学内での研修や、スタディツアーを通して、カンボジアの生活や医療について理解を深めることができていると考える。

(キーワード) カンボジア、開発途上国、看護学生

はじめに

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会¹⁾において、学士過程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標の中に、「グローバル化・国際化の動向における看護の在り方について理解できること」が挙げられており、看護師教育において国際看護について学ぶことが求められている。本看護学科では、国際交流活動を科目として設置している。カンボジア・スタディツアーは国際交流活動内容の一つとして毎年開催されており、今回で12回となった。これまでのスタディツアーにおいて、カンボジアの生活や人々の暮らし健康上の問題などを理解することができていることが報告されている²⁾。今回も同様に、カンボジアの生活や医療の現状を知ることを目的にスタディツアーを実施したので報告する。

1. 活動概要

1. 研修の目的

カンボジア・スタディツアーは、国際交流活動の一環として毎年実施されている。国際交流活動は、国内外での国際交流体験を通して、様々な国の文化や歴史、医療状況などを学び、多様な価値観への柔軟な思考を養うことを目的としている。看護学科は国際交流活動を科目としており、カンボジア・スタディツアーを通して、開発途上国の生活や人々の暮らしや医療について学ぶことをねらいとして実施した。

2. カンボジア・スタディツアー日程 (表1)

日程については表1に示す。

3. 研修参加者

看護学科1年生7名、2年生2名、教員2名の11名である。

II. 学内活動

2016年5月下旬より、新見公立大学・短期大学の全学科に対し、「カンボジア・スタディツアー」の参加者の募集を始めた。その後のカンボジア勉強会の企画・周知も同時に開始し、スタディツアー参加希望者のみならず、カンボ

表1 2016年度 カンボジア・スタディツアー日程表

月日曜	発着滞在地	日 程
2017年 1/5 (木)	関西空港 ホチミン着 ホチミン発 シエムリアップ着	関西空港ロビーへ集合 空路でベトナムへ 乗り継いでカンボジアへ 入国手続きと、ホテルへ ホテルにて夕食とブリーフィング (シエムリアップ 泊)
1/6 (金)	シエムリアップ	街中の小学校訪問(フンセン小学校) アンコール小児病院・ピジターセンター訪問 郊外の小学校訪問(コクチャン小学校) トンレサップ湖見学 オールドマーケット散策 アプサラダンスを鑑賞しながら夕食 (シエムリアップ 泊)
1/7 (土)	シエムリアップ	アキラ地雷博物館見学 CVSGジャックフルーツ農園見学・植樹 郊外へ巡回医療同行 キリングフィールド見学 影絵ショーを鑑賞しながら夕食 ナイトマーケット散策 (シエムリアップ 泊)
1/8 (日)	シエムリアップ シエムリアップ発 ホチミン着	アンコールワットサンライズツアー アンコールトム、タ・プロム見学 アンコールワット見学 ホテルで休憩しチェックアウト バプストリートにてカンボジア料理の夕食 空路、ホチミンへ 到着後乗り継いで
1/9 (月)	ホチミン発 関西空港着	空路帰国の途へ 到着後入国手続きの後、解散 (機内泊)

*連絡先: 吉田美穂 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

ジアへ関心のある学生への参加を呼び掛けた。

1. カンボジアに関する勉強会の開催

5月からスタディツアーに関心がある学生を対象にカンボジアに関する勉強会を3回実施した。

1) 第1回カンボジア勉強会 (2016年5月26日)

参加者は看護学科1年生4名、幼児教育学科1年生1名、教員3名の計8名であった。「カンボジアを知ろう」と題し、昨年度のスタディツアー参加者による報告、意見交換会を行った。今年度スタディツアーの参加希望者は、昨年度の様子を直接聞くことができ、さらには質疑応答の時間も設けたため、有意義な勉強会となった。

2) 第2回カンボジア勉強会 (2016年11月11日)

参加者は看護学科1年生7名、看護学科2年生4名、教員4名、新見英語サロン受講者2名の計17名であった。この勉強会は山内圭教授が主催する「新見英語サロン」との共同企画として、カンボジアからの留学生を講師に招き、「カンボジアの紹介」というテーマでプレゼンテーションを行ってもらった。カンボジアに関心が高い学生たちは、カンボジアの歴史、現在の状況、カンボジアと日本の関係など直接聞くことができ、スタディツアーへの参加意欲へつながった。

3) 第3回カンボジア勉強会 (2016年11月19日)

参加者は看護1年生8名、2年生2名、教員2名の計12名であった。

今回もカンボジアからの留学生を招きクメール語の指導を受け、その後、交流会を行った。同世代である留学生との交流は学生へ多くの刺激を与えた。

その他、随時カンボジア会を開き、現地小学校の子ども達との交流のため日本の紹介ポスターの作成などを行った。

Ⅲ. 研修内容と学生の学び

1. 主な研修内容について

1) 小学校訪問と交流

フンセン小学校はシェムリアップの街中の小学校であり、児童はサッカーのユニフォームのような制服を着用し、靴を履いていた。校舎は3階建てのしっかりとした造りであった。校庭の一角に売店があり、ジュースを購入している児童もいた。フンセン小学校には見学者が毎日訪れるとのことで、廊下から授業を見学していても、児童たちは落ち着いて授業を受けていた。1つのクラスでは、わずかな時間であったが、質問などさせてもらった。(写真1) 将来看護師になりたいかを児童に尋ねると希望している児童はごくわずかであった。カンボジアで看護師を目指す児童は私立の小学校に通っているという背景がある。今回訪問した小学校はどちらとも公立であり、経済的負担もあり看護師を目指す児童が少なかったと思われる。



写真1 小学校での交流の様子

その他に休憩時間に校庭で児童と交流することができた。学生が持参していたヨーヨーや紙ふうせんで一緒に遊んだ。クメール語は挨拶程度であったが、一緒に遊ぶ中で言葉は通じなくても楽しい時間を過ごし、学生は子ども達の笑顔が印象に残っていると語った。

午後からはシェムリアップ郊外のココチャン小学校へ訪問した。校舎は平屋であり、校庭は土であった。裸足の児童が多く、フンセン小学校とは環境に大きな違いがみられた。

交流の時間には、日本で練習したクメール語で挨拶を行い、日本についてポスターにて紹介を行った。その後は通訳にクメール語に訳してもらいながら、日本の四季や食べ物などの紹介を行った。交流のため日本の遊びとして「長縄、兜、折り紙、お手玉」などを一緒に行った(写真2)。学生がそれぞれの遊びを担当し、子ども達に声をかけ、一緒に作成に取り組んだ。兜や折り紙の折り方などは作り方のイラストを用意して子ども達の関心を集めていた。最初は緊張するといった学生達であったが、『小学生との



写真2 日本の遊びを一緒に行う様子



写真3 アンコール小児病院の入り口

ふれあいと言語が違ってつながりあえることが分かった』『言葉は通じなくても気持ちは伝わったと思う』など、感想を述べていた。

2) アンコール小児病院・アンコール小児医療ビジターセンター (写真3)

1999年にフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーが設立した小児病院である³⁾。1日500~600人の外来患者が来るとのことで、待合には入りきれないほどの親子が待っていた。カンボジアでは5歳未満の死亡率が28.7人/1000人(2015)であり、日本の5歳未満死亡率3人/1000人(2015)⁴⁾と比較しても多い。死亡原因では予防可能な疾患である呼吸器感染症や赤痢があげられ、子ども達の命を救うため、年中無休24時間体制で診察にあたっており、常に患者で混雑しているとのことであった。院内は一部のみ見学が許可されていたが、院内に畑やキッチンがあり、日本の病院設備とは異なる性質であることに学生は驚いていた。畑に面した建物の壁面には、野菜や果物と栄養素の絵が色鮮やかに大きく描かれており、食育指導の重要性や工夫を学ぶことができた。また、見学者の増加により、治療の妨げになるため、見学範囲は制限をしているという説明を受けた。外から見ることでできた一部の病室は、日本の病室よりも狭い間隔でベッドが配置され、窓も扉も開放し人の行き来が自由な状態であり、感染について問題はないのかと看護の視点で捉えている学生もみられた。

アンコール小児医療ビジターセンターでは、アンコール小児病院の設立に関する映像や、ビジターセンタースタッフに質問を行った。学生からは、救急車があるのか、医師や看護師の数、カンボジア人スタッフの数、日本の医師がいるのかなど、看護を学ぶ者として、積極的に質問していた。

3) トンレサップ湖見学



写真4 ジャックフルーツ植樹の様子

東南アジア最大の湖であり、世界最大規模で水上生活者が生活しているトンレサップ湖を見学した。遊覧船で移動したが、現地ガイドによると生活に関わる食事、洗濯、風呂、排泄のすべてを湖で行うとのことで、学生からは衛生面に関して疑問が挙がっていた。トンレサップ湖では、小学生が観光客を相手に仕事をしており、『カンボジアでは小学生の子どもが学校の空いた時間に働いていて、児童労働について考えた』と感想を述べる学生もいた。

4) CVSGジャックフルーツ農園見学・植樹 (写真4)

CVSGとはカンボジアシムリアップを拠点に活動しているNGOであり、活動の一つにジャックフルーツ園プロジェクトがある⁵⁾。学生は、現地の日本人スタッフに説明を受け、ジャックフルーツの植樹を行った。カンボジアは乾期であり、畑の土は石のように固く、学生は苗を植えるために土を掘り起こすのも難しい様子であった。苗を運んでくれるのは裸足の子ども達であり、学生を笑顔で手助けしてくれていた。学生は『自分たちの植えた苗が大きく育つことが子ども達にとって支援になることを願っている』と述べ、支援の在り方に様々な方法があることを実感していた。それと同時に子ども達が大きな労働力となっている現実に戸惑う学生もみられた。

5) 郊外の巡回診療視察 (写真5)

巡回診療を行っている医師に同行し、3か所訪問した。すべて郊外であり、道路は舗装されておらず、家屋は簡素な造りであった。そのうち2か所の患者は下肢の関節炎であったが、祈祷のような治療を実施していた。医師は下肢の状態を確認し、必要であれば内服薬の処方無償で行うとのことであった。もう1か所では80代の高齢女性の診察であった。食欲が低下しているとのことで、同行訪問前日に点滴を実施し、状態観察のためにその日も訪問したという



写真5 巡回診療の様子

ことであった。医療通訳から、カンボジアの平均年齢は60代であり、死亡原因では糖尿病が増加していると説明があった。郊外の比較的貧しい家庭では、白米や果物のみを食べる人が多く、糖尿病に罹患する人が多いが、金銭面や交通面で適切な治療が受けられず、悪化する人が多いとのことであった。学生は、日本と同じ生活習慣病が増加している現状に驚いている様子であった。さらに、食習慣の改善について介入ができるのかなど予防の視点から考えていた。

6) カンボジアの歴史体験

学内でカンボジアからの留学生からポルポト時代の様子などを聞き、カンボジアの悲しい歴史についてそれぞれが事前に情報を収集してツアーへ臨んだ。アキラ地雷博物館や、キリングフィールドでは、残酷な様子に言葉が出ない学生もいた。また、カンボジアの象徴であるアンコール遺跡の見学では、壮大な遺跡群に触れ、感動する学生の様子が印象的であった。

2. 国際交流について

カンボジア・スタディツアーに参加した学生が国際交流についてどのように捉えたか以下に示す。

- ・他国の文化、歴史などを肌で感じることができる
- ・日本では当たり前のことがその国では当たり前でないということを知ることができる
- ・日本の事を知ってもらう機会になること
- ・日本とはトイレや道路も生活環境が違っていただけど、たくましく生きている姿が印象的であった
- ・トイレに困り、衛生状態が悪くなった
- ・教育の大切さを改めて考えさせられる機会になった
- ・自分の視野を広げるきっかけ
- ・将来海外で支援活動を行いたいと思った

IV. 研修後活動

それぞれ活動報告レポートを提出した。その他、関心のある学生に向けて、活動報告を新見英語サロンや、カンボジア会で開催している。現在は、一部の学生を対象に報告会を開催しているが、国際交流活動の意義を広く周知するために、全学的な報告会を設けることが必要ではないかと考える。

V. 今後の課題

毎日、振り返りの時間として設けてはいなかったが、食事の時間にカンボジアの医療や生活について疑問などが挙がり、話し合う機会を設けた。その日のうちにディスカッションを実施することで、疑問点をインターネットで調べたり、医療通訳へ質問するなど対応ができたことは評価できる。

今後はカンボジアの保健医療福祉のシステムや看護師を始めとする専門職の実態など、事前に学習することで、現地での活動がより意義深くなるのではないかと考える。

VI. まとめ

今回のスタディツアーは、医療の知識を持つ通訳が同行し、わかりやすく説明があり、学生の理解につながっていた。看護学科は国際交流活動を科目としており、カンボジア・スタディツアーを通して、開発途上国の生活や医療について理解を深めることができおり、スタディツアーの目標は達成できていると考える。

VII. 参考文献

- 1) 文部科学省, 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, [インターネット On line] ,[2017年8月] http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/index.htm
- 2) 山本智恵子・古城幸子: 看護学生の開発途上国での国際交流活動と学生の学び, 新見公立大学紀要, 37, 161-165, 2016.
- 3) 特定非営利活動法人 フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN 公式ホームページ, [インターネット On line] ,[2017年8月] <http://www.fwab.jp/activity/ahc>
- 3) 経済産業省平成28年度医療技術・サービス拠点化促進事業, 医療国際展開カントリーレポート 新興国当のヘルスケア市場環境に関する基本情報 カンボジア編,[インターネット On line] ,[2017年8月] http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/health

hcare/iryoudownloadfiles/pdf/countryreport_Cambodia.pdf

- 4) ユニセフ世界子供白書2016,[インターネット On line],
[2017年8月]

<https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/01.pdf>

- 5) CVSG公式ホームページ[インターネット On line],
[2017年8月]

<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Sakura/8382/index2-hyoudai.htm>

